

【表現学関連分野の研究動向】

日本語教育

湯浅 千映子

2022年の日本語教育分野の表現学に関わる研究成果として、①アカデミック・ライティングや作文の評価研究、②やさしい日本語、③言語景観を取り上げる。

①では、学習者の作文評価の論文発表が活発な一年だったと言える。『早稲田日本語教育学』33号では、「ライティング評価の新潮流」の特集が組まれ、企画者の李在鎬(2022)によると、評価者の主観に基づく評価が妥当性と信頼性の面で課題が付きまとう問題を改善するため、2000年以降に様々な評価ツールが提案されたという。特集には「ループリック評価」(伊集院郁子2022)、「チェックリスト評価」(高野愛子2022)、「自己評価・ピア評価」(安高紀子2022)や「自動評価」(小森和子2022・李在鎬2022)の論文がある。また、評価者(教師)による作文評価のゆれに着目した研究として、トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里・数野恵理(2022)「日本語母語話者教師・非母語話者教師がナラティブ作文評価で重視する項目」『日本語教育』183号と坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子・数野恵理(2022)「日本語母語話者教師による日本語ナラティブ作文の評価観点の違い」『社会言語科学』25巻1号がある。トンプソン他(2022)は、評価者間で、作文評価で重視する項目や上位作文の決め手とする項目が異なり、その異なりを踏まえた作文指導が必要になるという。

②の庵功雄編(2022)『「日本人の日本語」を考える：ブレイン・ランゲージをめぐる』(丸善出版)は、第1章「日本語母語話者にとっての『やさしい日本語』：ブレイン・ジャパニーズ」で、定住外国人などの言語的マイノリティのための言語保障の方策として発展してきた「やさしい日本語」の理念がマジョリティである日本語母語話者にも重要な意味を持つとし、日本語母語話者の意識にある「難しさへの信仰」を捨て、日本語表現の評価基準を「わかりやすさ」「論理性」に転換すべきだと主張する。ここでは、行政、医療、司法などの難解な原文と従来の「やさしい日本語(Easy Japanese)」の間の「中間言語としての「やさしい日本語」・「日本語母語話者に求められる日本語表現」として、「ブレイン・ジャパニーズ(Plain Japanese)」を提唱する。災害時の減災のための取り組みとして始まった「やさしい日本語」は、四半世紀を経て、多文化共生社会の実現に向け、その対象や目的で新たな広がりを見せている。

近年、生教材としての③「言語景観」の利用が注目されている。ダニエル・ロング・斎藤敬太(2022)『言語景観から考える日本の言語環境—方言・多言語・日本語教育』(春風社)は、第IV部「教室における言語景観」で、看板や標識などの「公的空間で無意識に見る書記言語」である「言語景観」に見られる言語事象を、ディスカッションやアクティブラーニングの際に用いる取り組みを紹介している。ある広告ポスターの日本語教科書であまり扱わない表現(例「のまなきゃ」「飲んどかなくちゃ」)から文法的な変異形を学ぶことができるという。

(大阪観光大学)